

ほりお していたく
堀尾氏邸宅跡

所在地 丹羽郡大口町堀尾跡1丁目
(北緯35度19分4秒 東経136度53分16秒)

調査理由 県道小口岩倉線建設

調査期間 平成21年7月～21年11月

調査面積 1,950㎡

担当者 石黒立人・永井宏幸



調査の経過 県道小口岩倉線建設伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会が管理者となり、発掘調査および整理・報告書作成業務は国際文化財株式会社が行った。なお、愛知県埋蔵文化財センターは監督業務として県から委託を受けた。

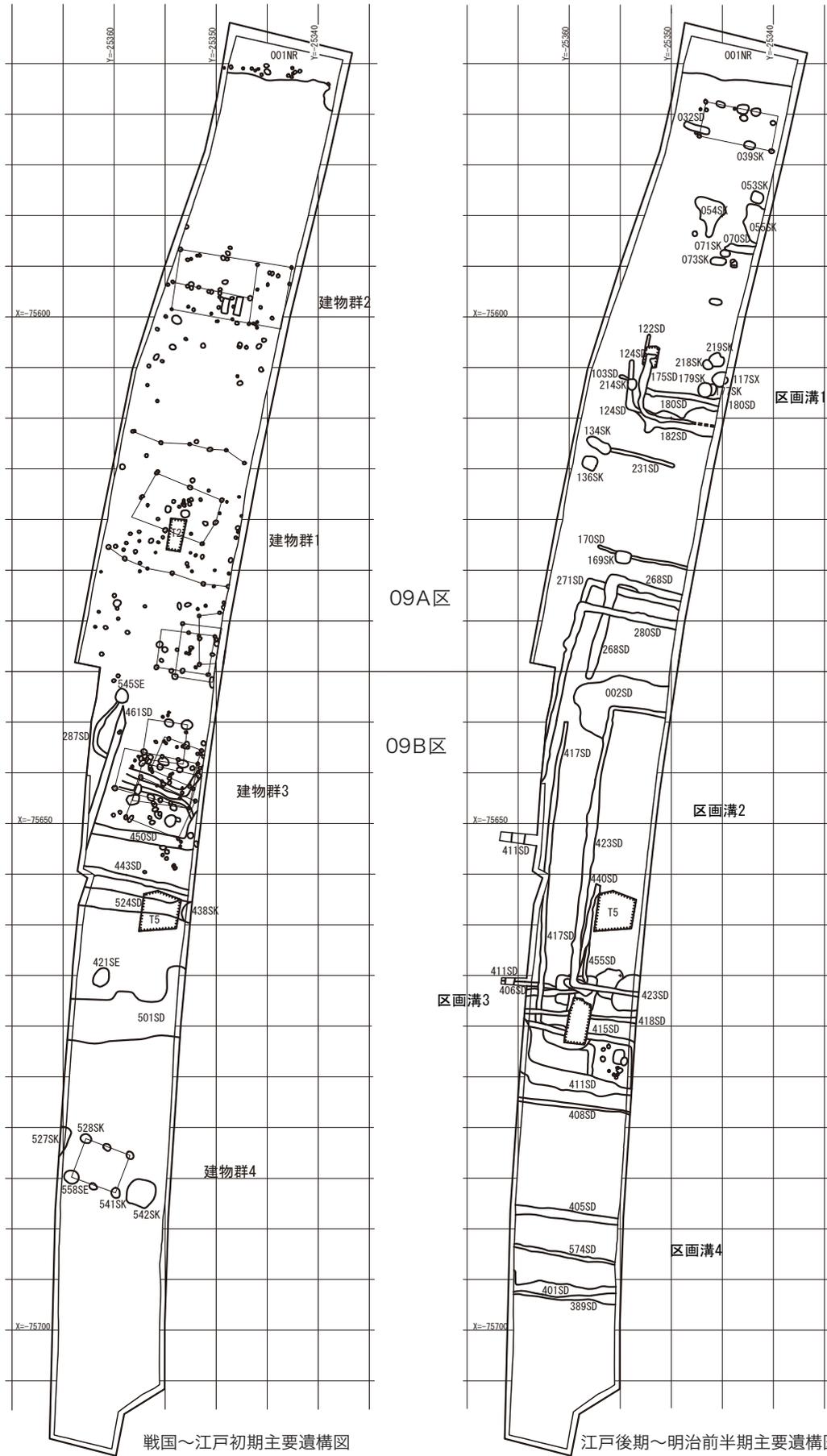
立地と環境 堀尾氏邸宅跡は大口町南西部、町域の中央を流れる五条川左岸にある。遺跡は木曾川によって形成された扇状地上に立地し、標高は現況19mを測る。戦国武将の堀尾吉晴はじめ堀尾金助の遺跡名に由来する石碑などは、調査地の東側に所在する八剣社境内にある。

調査の概要 調査は南北に延びた調査区を09A区(北側)と09B区(南側)に分けて行った。道路予定地以前の現況は竹藪を挟んで北寄りに堀尾跡公園の駐車場と南寄りに宅地があった。この竹藪付近は、09B区から南側に東側からのびる宅地であったことが明治17年の地籍図と照らし合わせて確認できた。

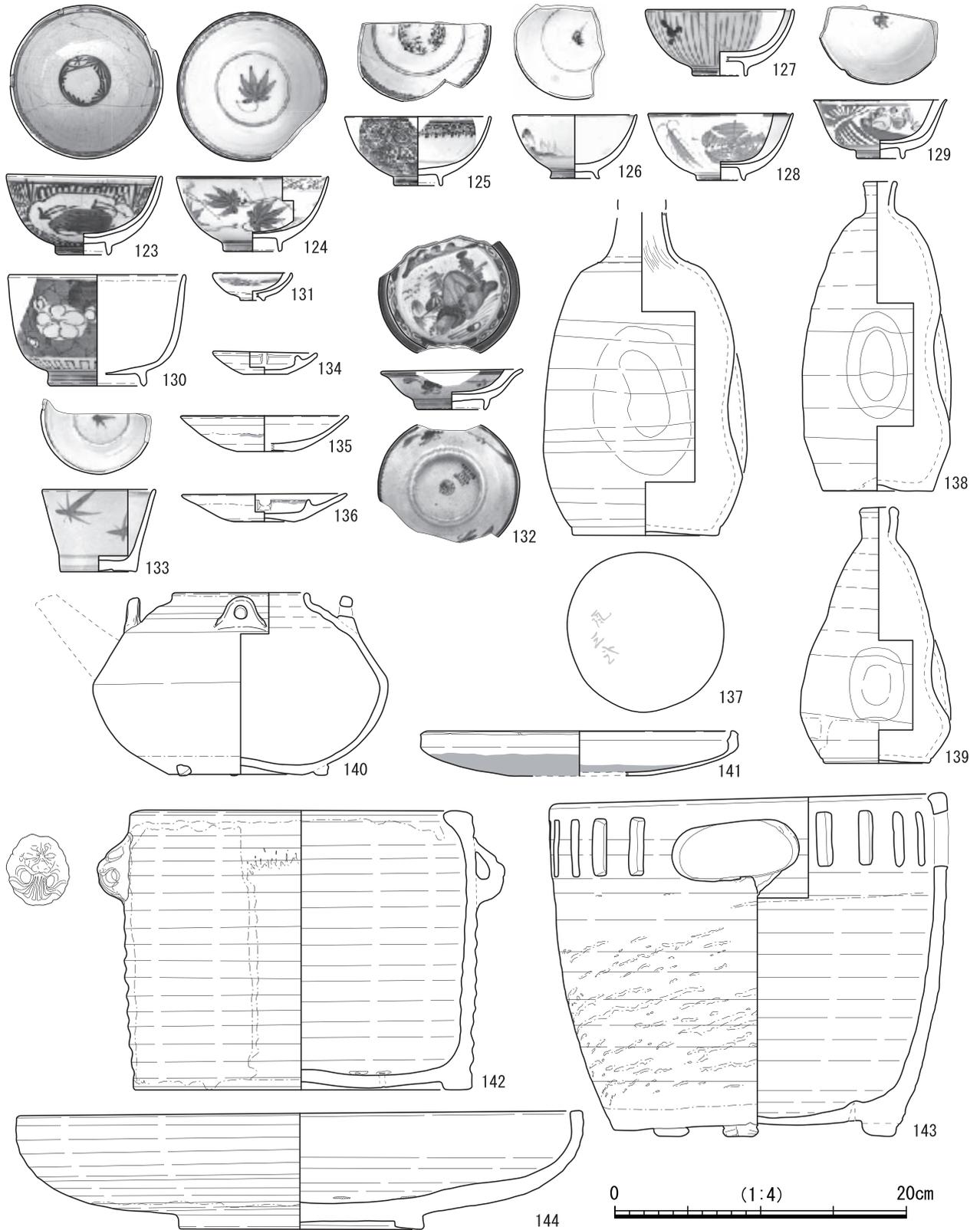
調査の成果 調査の結果、縄文時代から近代にいたる遺物を包蔵する遺跡であることがわかった。そのうち遺構が多く確認されたのは2時期ある。以下、これら2時期を中心に調査成果を概観する。

戦国～江戸 遺跡名に由来する戦国時代から江戸時代初期にかけての遺構と遺物は、幅3m前後の大溝501SDを基軸に展開する。501SDは東西方向に延び、調査区東壁で北へ屈曲する、クランク状となる。この北側に小区画の溝が建物群3周辺で重複する。150基におよぶ柱穴と考えられる遺構は、建物群4を除けば450SDより北側に展開する。建物群は4箇所のまともが見出せる。柵列と考えられる柱穴列を北と南にもつ建物群1、その北側と東側に底をもつ建物群2、450SDに北接する建物群3、501SDから南へ少し離れた建物群4がある。建物群1～3はいずれも2回以上の立て替えが確認できる。このように、大溝501SDを基軸に小区画溝と建物群が展開する空間として捉えることが可能である。さらに、大溝の規模から戦国時代の城館を想定することも可能であろう。

江戸～明治 江戸時代後期から明治時代前半の遺構と遺物は、4箇所認識した区画溝を伴う屋敷地と考えられる。その中でも屋敷地2とした東側に延びる区画は、最低3回の掘削による重複関係が認められる。区画溝3と4は区画溝2より切り合い関係から古いことが確認された。さらに溝の配置から区画溝1と2、区画溝3と4の組み合わせが想定できる。注目したいのは、423SD・280SD・411SDからの出土遺物である。円礫、瓦、陶磁器が集積した廃棄場が数箇所にまとまっている。これらの遺物は陶磁器類と瓦の時期比定から、明治時代前半までの資料群と判断した。したがって、明治24年の濃尾地震に被災した直後の廃棄と想定できる。また、区画溝2と3が重複する付近から鍛冶関連遺物がまとまって出土した。時期は限定できないものの、鞆の羽口や鉄滓、鍛造剥片などからこの付近で鍛冶を行っていたことはほぼ間違いないであろう。(永井宏幸)



堀尾氏邸宅跡主要遺構図 (1:600)



明治時代前半期に廃棄された溝423SDの資料実測図(遺物番号は報告書掲載と一致する)



戦国時代の大溝501SD



江戸後期から明治前半の屋敷地



瓦と陶磁器類が廃棄された溝423SD



地元説明会2009年10月24日



堀尾氏邸宅跡の調査区と周辺(南西から)